

### 3 特別寄稿 思い出

小出進

大学院を終了すると、1960（昭和35）年に岩手大学農学部総合農学科に勤務した。総合農学科というのは、第二次大戦終了後、1949年に学制改革により新制大学が発足した時に、全国10の国立大学農学部を設置された。この学制改革の際には、敗戦直後の日本の経済事情により、学生数の削減、学科学部の整理統合がなされたが、そのなかで、設置というのは、珍しかった。これは、アメリカが日本の大学農学部が専門に分化しすぎている。しかし、アメリカの農場では、それらが統合されており、農場のマネージャー養成には、多くの分野を熟知した技術者が望ましい。そのためには、いくつかの専門分野からなる1学科を設置するように勧告したといわれている。しかし、現実の日本農業は、零細経営であり、農場のマネージャーは必要がなかった。総合農学科の卒業生は、浅いが広範な知識を有しており、農業高校教員には適しているという事となり、あわせて、高校・中学理科、中学技術科の教員にも就職していった。



私の赴任した岩手大学総合農学科は、総合農学、生活科学、工作第一、工作第二という4つの学科目（講座制ではない）から成立していた。そして、総合農学は農学全般、生活科学は農芸化学全般、工作第一は農業機械、工作第二は農業土木を担当教育していた。この学科目は大学により若干相違している。この学科目は大学により若干相違している。私は工作第二を担当した。工作第二は、私の他に、もう1名いて、計2名で、農業土木全般を教育する訳である。農業水利と測量実習と農業工学科の農地計画の授業をする事となった。前2者は私の専門とは違う。特に測量は学生時代以来である。この測量を担当して、技術であると痛感した。毎時間きちんとしていかないと、次の授業に差し支えるのである。例えば、パーニヤの読み方を、いかげんにしては、次に進めない。また、学生時代に福田先生等の著書を教科書として学んだが、丸安先生の測量学と比べると、丸安先生は測量専門だけあって分かりやすい書であり、福

田先生のは誤差論に詳しい書であると感じた。学生に農業高校の卒業生がいて、測量は私よりできるので閉口した。

総合農学科は農村調査をして日本農村の実情を把握する事に重点をおいていた。学生としていた農業工学では実験を手法とする研究をしているが、そのなかで調査を手法としていた私は総合農学で居場所を得た思いであった。1960年に三陸沿岸にチリ地震による津波があり、大船渡で死亡者があった。北は久慈市から南は気仙沼市まで調査をした。三陸は断崖絶壁の連続で、その中の海岸に住居がある。田老町は堤防に市街地をとり囲まれているのには驚いた。

かくするうちに、日本の状況、日本農業に大きな変化があった。経済の高度成長が始まり、食糧増産の時代は終了し、1961（昭和36）年に農業基本法が制定され、農業構造改善事業が開始された。大経営・農場制農業への変革がめざされ、いわば、総合農学が活躍する時代となった筈である。しかし、現実には、小経営兼業・出稼ぎの時代となり、大経営への可能性はとぼしかった。かくするうちに、大学農学部も「近代化」となったのである。そのリストラの対象は、わが総合農学科である。理由は卒業生の就職先が農学科とほぼ同じで、いわば、第2農学科であるということである。当時は戦後のベビーブームの就学が一段落し、中学・高校の教員採用が少なくなってきた。頼みとする農業高校は拡張の時代ではなく教員も新採用は少数となっていた。また、中学・高校の教員は、どの学科からでもなれるのであり、総合農学科が特にといい訳ではない。したがって、特定の就職先が確立してなく、農学科と重なるという状況であった。公務員の専門分野に総合農学があれば違っていたのではないかといわれたが、それも直接対応する就職先がないなかでは不可能であった。岩手大総合農学科の方も、教授・助教授・助手あわせて7名という農学部6学科のなかで、最小の教員数である。しかも学生数は1学年30名と同じであった。さらに、学科の教員の研究室が、まとまってなく、それぞれの出身学科の研究室群のなかに室があるという状況であった。やっと、農芸化学科が、新築建物に移転したので、その空いた建物に集めるという事になり、私も始めて専用の1室を配分された。なお、集まった教員は約半数である。この集まったのも1年で、1964（昭和39）年に、総合農学科はなくなり、畜産学科が新設され、農学部に大学院修士課程が設置された。教員はそれぞれの出身学科に入った。学生には「つぶしたのは先生達だ」といわれたが、一言もなかった。なお、3、4年で、全国10の総合農学科は無くなった。